

平成 20 年度外部評価（機関評価）結果 生物科学総合研究所

項目別評価

凡例 5：非常に優れている 4：優れている 3：妥当 2：見直しが必要 1：全面的見直しが必要

1 運営方針及び重点分野 評価 5:5人 4:3人 3:-人 2:-人 1:-人

- 岡山県へのフィードバックの強調があればもっとよいと思われる。
- 方針重点分野に関しては優れている。
今期はこれまでの成果を結実される時期であり計画は妥当
- 県独自の産業育成には県独自の基礎・基盤研究が必要であり、RIBSはこの役割を果たしている貴重な研究機関である。
- 研究所の看板となる研究内容、方向性を明確にするとよいのではないか。
- 人類生存を支える基盤は植物生産であり、植物と微生物のバイオテクノロジーに焦点を絞った重点分野の選択は非常に優れている。
- 最近、科学技術動向研究所が発表したサイエンス・マップによると、植物科学の発展はめざましいものとされている。その中でも重要とされている分野の研究が本研究所で推進されている。
- 最近のエネルギーや食糧問題にも資する研究が行われていることは評価したい。
- 運営方針としては3分野を設定し、基礎・基盤研究をもとに農業や産業への応用に繋げるというもので、これまでの実績から考えても極めて優れている。
- アドバイザーの導入、自己点検評価、ピア・レビュー等、必要と考えられるすべてのシステムを用いて対処している点で高く評価できる。

2 組織体制及び人員配置並びに予算配分

評価 5:4人 4:2人 3:1人 2:1人 1:-人

- 県予算で実施する事業、外部資金で実施する事業を（アバウトでもよいので）分類するなどして外部へアピールするのもよいのでは？
- 競争的外部資金をよく獲得されている。県が委託研究費にまで保留をかけないで頂きたい。
- 県からの予算が不十分である。人数のわりにテーマが多すぎる印象
- 外部資金の比率が高いと空洞化を招く。
- 研究費における外部資金の額が大きいことは評価できる。
- 外部競争的資金の獲得率が高く、質の高い研究が実施されていることを示している。組織体制と人員配置は良く機能していると考ええる。
- 外部競争資金を大量に獲得し、数多くの流動的な博士研究員を雇用している点等、研究体制が極めて上手く動いている。しかし、県からのサポートの減少は憂慮すべき点である。
- 運営費での研究費に対して、外部資金の多さは特筆すべきことだと考えられる。これは非常に望ましい予算状況と評価できる。（本来なら運営費がもっと多い方が better だと思うが・・・）

3 施設・設備等

評価 5:1人 4:7人 3:-人 2:-人 1:-人

- ・ 施設・設備は大変素晴らしい。これらを利用してどのような研究が行われたかを外部にアピールできればよいのでは。外部との共同研究による活用事例を示すことが望まれる。
- ・ 必須な先端機器や設備がよく備えられている。一部更新の時期になっている。
- ・ 研究所の規模としては優れている。
- ・ 最新機器のリース契約による導入は可能か？
- ・ 遺伝子組換え用隔離圃場の設備を整えているのは素晴らしい。積極的に活用してほしい。
- ・ 建物全体として省エネルギーに配慮することも今後必要と思える。県の代表的な研究所として「省エネ」をアピールしてほしい。
- ・ 隔離圃場や特定網室など基本的組み換え実験の基本的施設は整っている。開所当初最新の研究設備が配置されたが、その後の追加はやや少ないかもしれない。
- ・ 質・量ともに十分な施設・設備を保有されていると判断できる。

4 研究成果

評価 5:7人 4:1人 3:-人 2:-人 1:-人

- ・ 基礎研究としての Output は素晴らしい。論文や発表では表しにくい Output (県民への理解のためにも) をどのように示していくかの検討をしていただくとより良いと思われる。
- ・ 成果の発信、又、特許取得も着実に進められており優れている。
- ・ Basic な成果は高い。実用化に向け、県の支援が必要。
- ・ 研究所の規模としては大変優れていると思われる。
- ・ 国際的に発信していることは高く評価できる。
- ・ 外部資金の獲得状況から見ても優れた業績をあげられていることが分かる。第1期から第2～第3期にかけて成果の発表も格段に伸びていることも評価したい。
- ・ 研究所として、質・量とも十分量の成果をあげている。
- ・ 県の研究機関としては非常に「こころざし」高く研究が行われており、その成果も高いレベルに維持されていることは高く評価できる。

5 技術相談・指導、普及業務、行政検査、依頼試験等の実施状況

評価 5:-人 4:3人 3:5人 2:-人 1:-人

- ・ 試験場等との住み分けを行い、この研究所でできることを強調することが必要かと。分かりやすい共同研究のセッティングも重要と思われます。
- ・ 県レベルあるいは国、国際レベルでの相談、指導に当たっておられ優れている。さらに県レベルでの技術指導の連携を強められると良いであろう。
- ・ 将来は、各現場の要望に合わせた技術移転を行う努力が必要になるのではないかと。
- ・ 今後も技術移転を続けてほしい。
- ・ 岡山県の基盤研究拠点として他の県研究機関への技術指導をしている。しかし、連携はまだ十分とは言えない。現在まだすりあわせている状態。
- ・ 適切な取り組みをされていると判断できる。

6 人材育成 評価 5:1人 4:2人 3:5人 2:-人 1:-人

- ・ 研究所の性質から考えて、ポスドクの採用 → 新たな研究員としての採用（大学教員も含めて）という実績を強調できれば・・・
- ・ 院生の受け入れなど着実に進んでいる。さらに次世代の育成を進めて行けばよいと思われる。中高生、一般向けの研究所公開は良い。
- ・ 県研究機関の人材の研修目的の受け入れは？
- ・ 積極的に情報交流を進めるとともに、所内の研究者の能力を十分に生かせるようなシステムを取り入れてはどうか？
- ・ 若い流動研究員を大量に雇用し、育成している。また、高校生などに対してもセミナー、実習などで貢献している。
- ・ 本研究所におけるミッションの中で人材育成がどの程度重要なかが明確ではないが、上記のミッションを果たす上での人材育成は行われていると考える。

7 他機関との連携 評価 5:2人 4:5人 3:1人 2:-人 1:-人

- ・ Output が目に見えるようにできればよいと思われる。
- ・ 総じて良いと思われる。県下との連携が大切か？
- ・ 他機関との契約や研究費の扱い方については、県側のフレキシブルな対応を望む。
- ・ 県内の農業関係の研究所や機関ともっと連携した方がよいのでは？
- ・ 現人員としては十分な努力をしていると思われる。
- ・ 県内だけでなく全国の大学で行われている研究との連携も進めてほしい。
- ・ 多くの研究機関と実質的な連携をしており、十分な成果があがっている。大学との学生受け入れをもとにした連携も評価できる。
- ・ 共同研究や県立大学との連携等、十分その役割を果たしていると考ええる。

8 県民への情報発信 評価 5:1人 4:4人 3:1人 2:1人 1:-人

- ・ 研究所の性質として基礎の最先端研究に重点がおかれているので、下記のターゲット別に情報を発信できるようなシステムを・・・
 - 一般県民・・・夢を語る
 - 中高生・・・将来の職業として、理系の夢
 - 中小企業・・・技術説明
- ・ HP をさらに充実されると良いと思う。分野毎に大きい違いがあり、アピール性に欠ける研究分野がある。
- ・ サイエンスリテラシーがこれからますます重要になるので、小中高校教員向けの情報発信を検討されてはいかがでしょうか。また、出前授業ももっと積極的に行う（回数を増やす）方が良いと思う。
- ・ 現人員としては十分である。
- ・ 植物科学の応用の裏には「組換え体問題」があることを考えると、直接この問題にふれる必要はないと思うが、県民への情報発信や透明性のアピールは必要と考える。
- ・ 公開セミナー、研究所オープン、中高生対象の実習、新聞・マスコミなどの発表など優れている。
- ・ 中高生への実験学習、県民向け講演会、各種シンポジウム等、十分な発信を行っていると思われる。

総合評価

凡例 5：非常に優れている 4：優れている 3：妥当 2：見直しが必要 1：全面的見直しが必要

評価 5: 7人 4: 1人 3: -人 2: -人 1: -人

- ・ 世界最先端の研究を確実に実施されているのはすばらしい。その状況をどのように素人に伝えるかが最も重要かもしれない。高校生、大学生には専門的なことを伝えること・・・（素人ではないので）と、一般人に分かりやすく伝えることは区別するのが望ましい。現在のプロジェクトがどのように県にフィードバックできるか（夢でもよいので）を積極的に発信するとよいのでは？
- ・ 総じて大変優れている。いずれも知財化を推進することで県は潤うと思われる内容が多いが、県の対応が不十分であると思わざるを得ない。バランスもあるが、将来の投資は考えるべきである。
- ・ 予算や研究員数を考慮すると十分な成果をあげているように思う。県民へのアピールをもう少し行い、具体的な商品につながる成果が出れば申し分ない。植物科学はこれからの食糧や環境問題への対応では重要である。県の一層のサポートを望む。実用植物の形質転換の開発などを当研究所に限らず、県内で取り組む必要がある。
- ・ 現在の予算状況と人員としては、十分な研究成果をあげている。一方、地方自治体の研究所として将来発展してゆくには、研究に加えて県に具体的なメリットを与える方法を検討する必要があると思われる(特に県民へのアピール、県研究機関との共同プロジェクト等が重要)。また、競争的外部資金に加えて分析受託業務等、収入を得る手段を見つけ出すことも検討されてはいかかがか。
- ・ 国際的に高い業績を発信しているユニークな研究所として国内外にその存在が認められている。競争的外部資金の獲得額が高いことにもあらわれていると思われる。
- ・ 研究所が推進しているプロジェクトは、植物科学の重要分野であることで問題ない。過去2期の間には優れた業績をあげてきたことも評価できる。
研究所内で生まれた知的財産を広く運用するための知的財産管理システムが存在するかどうか？研究所の成果を社会（岡山県）に還元する意味でも知財、TLO、特許事務所の連携によるシステムが必要と考える。
- ・ 体制構築をはじめ運営が所長のリーダーシップのもと極めて効率的に行われている。また、この継続により研究業績、特許出願が飛躍的に増加しており、社会対応も広く深くなっており、研究所が発展していることが顕著である。
Output を特許だけとしないで企業にその権利を売ったりするように新たな方策を考えることも必要かと思われる。
- ・ 各項目において高い評価を与えられる活動をされており、それをトータルとしてまとめれば評価は「非常に優れている」と結論できる。